

# 神戸のこと 手当り次第

淀川長治  
え・松本宏



三中時代の私の英会話の先生はトリメーンという人であったが、そのあとにマンという先生が入れかわった。そのマン先生の息子さんはいま東京の英字新聞につとめていて私の親友である。トリメーン先生のまえに女の先生が少しばかりおられたが、この人の日本語がけっさくで「大きな声で」と、教室の生徒に呼びかけるとき必ず「オーキャラコオーデ」といわれる。英語のリーディングを全生徒に音読させるととき「ハイ、オーキャラコオーデ」が可笑しくてみんなでキャラッとしたものである。

「エバンタイ」という外国美術品店を私の家がやっていたので、よく外人客が見えたが、その一人に「あら、そー」という日本語で「アリヤ、シヨー」というきれいな婦人がいた。この人が自動車で

のりつけると「アリヤ、ショーさんが来やはりましたでエ」と店員が言う。フランスの御婦人であった。

顔がきくと買いものもつけになる。ところがアメリカの大きな会社の重役夫人が景気よく買ってドロンをしたことがあって、その会社だけはつけお断りを願つた。ところがこれを怒った同じくその社の夫人が、そのドロンをきめこんだ人は何を買ってどんな年かこうの人かと聞く。そこで品物はハサック（革の腰かけで丸い大きなザブトンみたいなもの。スツールとも呼んだ）その人は四十二三のこれこれの様子をした奥さんと説明すると、その人は帰米してはいない、この町にいますよ……というわけで、それから一週間目にその本人を引っ張つてきて「さア、あんた、お払いなさいよ」と彼女の腕をこついたのにはびっくりした。これはかねてそのハサックの革の色彩と模様をきいて、それをなんとなく婦人仲間の宅でさぐつていたところ、ある夜パーティに招かれたその婦人の家にそれがあつたので根ぼり葉ぼり聞きさぐり、とうとう白状させたそうである。

私は熊内町に住んでいたことがあって、雲中小学校前から市電に乗るのだが、そこを私の若いころはよく馬力（ぱりき）車が通つたものである。米俵なんかを山と積んで、馬が鼻を鳴らし汗びっしょりで曳いているが、それでも馬子が「コラッ」と馬の尻に鞭がわりの繩をビシリと当てる。ここへ老西洋婦人がやつてきた。彼女はやにわに、ものも言わないで馬力車から俵をひつ擲んでは地面へ投げだした。馬子はあつ気にとられ見とれている。五、六俵も汁をかきながら引きずり落したその西洋婦人とたんに両手をあげてその馬子を殴りにかかった。馬子はそのけんまくに顔をよける。婦人はかなきり声で叫ぶ。すると馬子が「ベクボン、ベケボン、ベケペノケ」と言った。やがて婦人は怒つたことで気がすんだのかさつきつと去つて行つたが、そのあとで馬子が「異人ババアにや文句も出んわ」とまたその米俵をもとのように積んでいる。そのあいだ汗びっしょりの哀れな馬が小休止できたのがもつけの幸いという事になつた。

新聞地のキネマ俱楽部ではよく外国人の実演が映画のあいまに小

一時間くらい演じられた。そのころそんなのを演るのはたいがい白系ロシア人でいかにも貧しげであった。夫婦に子供三人ぐらいで、歌つたり踊つたりの素人芸である。その太ったおかみさんがハンガリア・ラブソディの伴奏でリボンのさがつたタンボリンを振り叩きながら、せまい舞台で踊つてゐるのを二階のうしろの特等席から見ていた外人婦人が二人「あらまあ、ひどいわねえ」と顔をしかめて囁き合っていた。中学生の私が「ひどいわねえ」の英語がわかつたのは可笑しいが、そう、たしかに聞えたのであった。私でさえその舞台のデブさんの踊りは見ていてお気の毒だった。

ある関係で私はそのキネマ俱楽部の試写というものを見せてもらえることになった。「デンティー」という長篇と、もう一つはラリー・シモンの短篇の滑稽いでこれをグラグラ笑つて見たことを思い出す。その試写はこやがねてから夜の十一時ごろ、説明者（べんし）が五、六人で明日かわりのその新作を台本の会話とてらしあわせて見るのであるが、これを別の一人が初めから終りまで台本を声を出して読みあげる。その「デンティー」のあととのラリー・シモンの短篇のとき西洋人の七才くらいの男の子がチョコチョコと私たちのそばにやってきてケックッと体じゅうをふるわしてその滑稽い短篇を笑いころげて見ていたのだが、その手に小さな生きたゼニ亀を持つついて、その亀の甲にナイフで自分の名の頭文字をきざんでるのが私には面白かった。その青い青いすごく青い目をした金髪の子は、今週までこのこやの舞台で両親と歌と踊りの親子一座の芸を演つていた子供である。その子にべんしの一人が「こら、おまえのおかんケツまくってゆんべ寝とったぞ」とどなりつけていた。この親子は説明者のひかえ室を宿に寝泊りしていたらしい。この日本語を聞いてその子は意味など解りはしなかつたろうが、とたんにワッ！と泣き出して「ママア！」と裏の方へ馳けこんでいって姿が見えなくなつた。そのとき、私は、なんとなく神戸の西洋人の、さびしい人生を嘆いだようで、私までさびしくなってしまったのであつた。



# 徳川家康

司馬遼太郎  
西勝



ちかごろ、徳川家康の再認識ということがよくいわれる。もつとも再認識といつても、べつに高度な意味ではなく、家康の堅実その人の人生とその成功が、ちかごろの経営者の「ためになる」というだけのことらしい。つまり、戦前の少年雑誌的関心である。読めばためになる、ということは。

しかし、わるいことではない。家康は確かに教訓の材料になる人であり教訓になる以上にもっと文明論的に研究されていいひとだ。決して名門のうまれではない。

家康はえらくなつてから、「おれは源氏の嫡流だ」とか、「新田義貞の子孫だ」とかいって家門に滔（はく）をつけたが、そういう家ではない。家康から数代前といえば、三河松平郷のいまいえば村長といつた程度の家で、血統もあいまいなものであった。この点は、のちに「平家の血流である」といつていた織田信長の家系にし

ても似たようなものである。

家康の数代前、北国のはうをうろうろしていた乞食坊主（高野聖であるうか）が、松平郷にやつてきた。当時はこういう無銭旅行者がうようよいて、祈禱などもする。京のはなしや諸国のはなしなどもする。いわば、ミニケーションの役をはたしていた。だから、田舎の豪族や名主などは、よろこんで泊めてやるのである。

その男も、松平郷の松平家に長逗留していたが、やがて当家の後家さんとできてしまつて子がうまれた。こういう坊主が諸国をうろするたのしみは、こういうことがあつたからであろう。

その子が、家康の祖である。

この坊主は、よほど好色であつたらしく、隣村の酒井家にもとまりこんでそこの後家とのともできて、子供がうまれた。この子が、のちに徳川家の譜代大名の筆頭になつた酒井家の祖である。

家康はえらくなつてから家門をかざるために「じつはその乞食坊主が新田義貞の子孫であり、従がつてわが家は源氏の名門になる」などというようになつた。

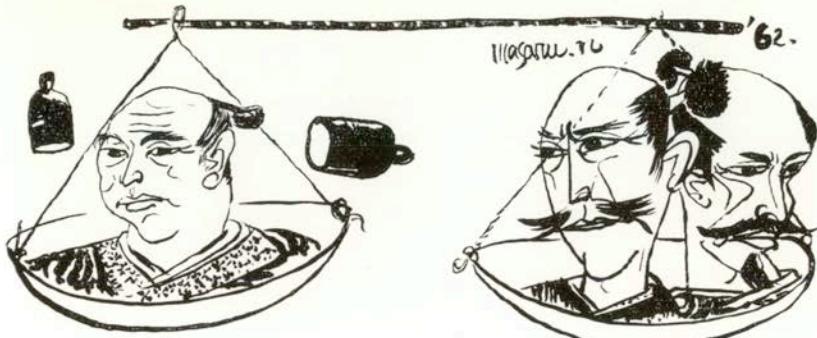
家康の松平家が大きくなつたのは父の代で、近隣の諸豪族を切りなびけて範囲を三河半国にまでひろげたが、家康の幼少のころに家来にころされて死没し、あとは家康一人がのこつた。戦国のことだから、幼主では家がつぶされる。このため隣国駿遠両国の大大名今川家人質にとられ、領地は今川家管理ということでかろうじて温存された。

その後、家来に売られるような形で織田家の人質になつたり、さまざま苦難をなめて成人し、こういう生いたちから来るのか、家康には信長のような坊ちやん育ちのわがままさがつゆもなかつた。

が、これは教訓にはならない。信長の天才的な状勢判断や行動は苦労育ちや貧乏そだちでは持てなかつたものである。信長が家康のような育ちなら、おそらくかれの天才はそだたなかつたであろう。

「若いころの苦勞は薬になる」

というのは、よほどの大才の場合か、たまたま成功した人のいうことで、苦勞というのはほとんどのばあい、人間を小さくするほか



は役立たない。

家康は、信長や秀吉のような天才はもたなかつたが、なによりもこの両雄よりすぐれていることはその義理堅さ、律義さであり、家康のこの性格に対する信用が、かれをして天下をとらしめたといつていい。

家康は、だまさない人だった。

家康は成人してから自分の領国三河にかえつたたちまちのうちに三河全土を平定したが、このころ、信長とのあいだに、織田・徳川攻守同盟というのを結んだ。

攻守同盟などというものは戦国時代に掃いてするほどあつたもので、そのほんどうが、いや、そのすべてが長く守られたためしない。

たつた一つの例外は、織田・徳川同盟である。

しかも同盟の片つ方の織田信長という人はたんげいすべからざる外交家で、かれには武田信玄でさえだまされた、徹底的な狡猾外交で、しかもそのだまし方のうまさは天才というよりも神様に近かつた。

だから、織田・徳川同盟などは、朝露のように頼りないものであるはずだったが、これが、信長の死までつづいた。つづいたのは、家康が絶対違約しなかつたからである。家康は律義そのものの男で、何度も信長に煮え湯をのまされたが、それでも裏切らなかつた。

「三河どのの律義」

というのは、天下に知られるようになつた。どの大名も家康の言葉だけは真（ま）にうけて大丈夫という見方をもつた。戦国の世でこれはどの信用のある男はいなかつた。

話はすつとのちになるが、秀吉が死んで幼主秀頼がのこり、天下がゆらいだとき、豊臣恩顧の大名でさえ、きゆう然と家康に款（かん）を通じた。

当然なことであつた。

「内府（家康）にさえついておれば、わが家を悪くなさることはあるまい」という信用が、むしろ神話的になつていたのである。

徳川家の天下を決定した関ヶ原の戦いはこういう条件のもとに行なわれたもので、家康方で必死に働いたのは、秀吉の子飼いであるはずの福島正則、加藤清正（たまたま肥後に在国中で合戦は近隣の西軍が相手だったが）、浅野長政らであった。かれらは、感傷としては豊臣への恩義を思っているが、現実では数十万石の大大名である。家来も多い。もし政治的に失敗すれば、多数の家来を路頭に迷わざなければならぬ。一片の感傷で自分の処世を決するわけにはいかなかつたのである。家の保存の為には、何よりも安心なのは徳川家康につくことであつた。「内府は悪いようにはなさらぬ」。

家康は、後世「たぬきおやじ」といわれているが、かれは権謀術数のすきな男でもなく、上手な男でもない。おなじ戦国の英雄でも権謀術数の大家は、武田信玄であり、毛利元就であつた。かれらにぐらべると、家康などは生涯子供のようなものである。

半生、信用に生きた。

だからこそ他人の家来（太閤の遺臣）まであらそつて家康を総帥に押したてたのだ。

家康はそういう男である。

かれが、たぬきおやじになつたのは七十前後からで、当時大阪城には秀頼がいた。すでに二十になろうとしていた。

家康自身は、七十の老人で、老いき、長からうはずがないが、秀頼はこれから年齢である。もし自分が死ねば、せっかく自分になびいている豊臣恩顧の大名はふたたび豊臣家に帰るであろう。家康がせっかく得た天下は、砂上の楼閣になりかねない。

ここで家康は、がらにもないたぬきおやじになつた。まるで死にものぐるいのように秀頼をいじめ、だまし、ついにその家を覆滅した。

家康が律義のカンパンをおろしたのは、そういう事情からであった。このため後世食えぬ男といわれるようになった。同情されない人間である。

「ふたりの恋人」——私は音楽会には必ずこの歌をうたうことにしていますと言う石井好子さんにとっては、日本の国とパリとが二人の恋人なのである。その石井さんはシャンソンの本場で歌手としてパリッ子の人気を博したのだから、これこそほんまものというべきだろう。しかし彼女がパリで获たものは歌手としての人気だけではなかつた——もつと彼女に一生つきまとう貴いものを身につけている。

石井さんがここまでになるにはさすがになみなみならぬ苦労を積み重ねてきている。たびたび大臣を勤めた父を持ち、芸大声楽科出身という恵まれた境涯に育つた好子さんは、世間なみの幸せな途をたどる安易な生き方はあつたが、彼女は環境に甘えず、逃避を求めて、人生の悩みは悩みとして堂々

と取組んで強く生き抜こうとしてきた。その第一歩がアメリカ留学である——「その頃は食事代をきりつめていたのでいつも空腹でした：朝食は抜きにして、昼は学生食堂で一番安い十五セントのサンドワッчを食べていたので、横で一ドルもする食事をしている学生が羨しかつた……しかしそんな思いも私をみじめな気持ちにはさせず、常に未来を信じてハリ切つてしまつた……」

こんな話を、「アカデミー」の止まり木にかけて聞いていた時の彼女は、全く好感の持てる女性だった。生来屈託のない性格で、気取りやらいがみじんもない、すべてがアケすけだ。それでいて気持ちが崩れるということもなく、折目はすこぶる正しい。單に面白いといつだけで

なく、さすがに勉強もし、いい苦労を身につけていると思わせるだけの内面的なものを持つてゐる。それでいて、理性、ムキだしの冷たさはなく、いたつて温か味の感じられる人間的な魅力の豊かな女性である。

彼女の肢体は美しい。ある雑誌に「日本一の美しい脚の持主」と書かれていたが、そのせいもつてか加州ではミス・テレビジョンの第一位に選ばれたことを知つている人は少いだろ。その時にうたつた歌も「ふたりの恋人」だつた。彼女はその賞金をふところに、憧れのパリへ旅立つたのである。パリに着いて三日目に、夢まで見ていたパリの本場で仕事にありつきしかも幸運なデビューライに恵まれて勉強を続けたのである。僕は彼女の歌も好きだが、こんなのがこの上もなく好きなのだ。

(国際会館常務取締役)

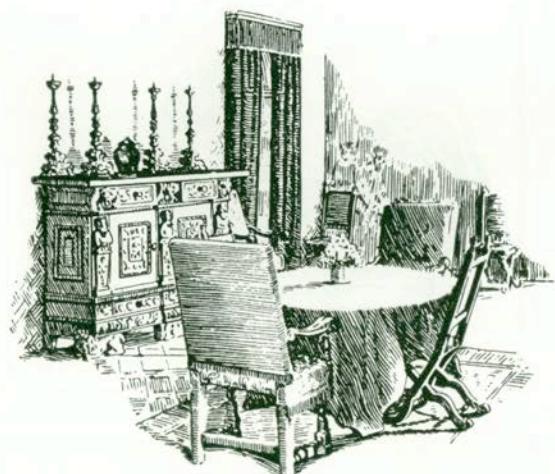


## 私の好きなスター

石井好子さん

小寺 嶽

家具・室内装飾・工芸品



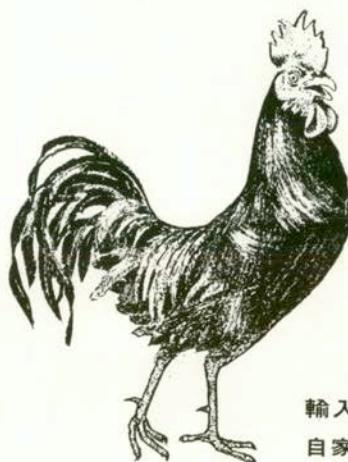
吳作陳設  
みよしや

大神戸大丸前  
電話神戸(3)三三八八九番前  
姫路店やまとやしき百貨店三階  
電話大阪(3)五五四八番  
電話大阪(3)一二二一一番

永田良介商店

大丸前 TEL { (3) 5520  
                  (3) 1290 }

おしゃれの秋



輸入ネクタイ  
自家特選タイ  
卸・小売

秋をシャレましょう  
ネクタイがあなたの服飾の  
ポイント。グーンとイカすのが  
沢山そろっています

ネクタイの  
**元町バザー**

神戸×元町 TEL ③1401

\* For Ladies' Shop

美しいお洒落に  
シラサのバッグ



特選  
ハンドバック  
専門の店

シラサ

元町2丁目・③0813

# すてきなお嬢さん こんにちわ！

聞く人

岡 部

伊 都 子

(随筆家)

話す人

詫 摩

(たくま)

良

(薬剤士・大阪ガスKK神戸工場診療所勤務)

カトリック信者である詫摩さんは、薬剤士としてお勤めのかたわら、神戸新川にある暁光会の育ての親、バラード神父(仏)のよきアシスタントとして活躍してらっしゃる心のやさしいマリアさまといった感じのお嬢さんです。困っている人達の為、骨身を惜しまず働いてられる詫摩さんに一人でも多くの協力者がふえますように――

岡 部

「バラード神父さまとお知り合いになられ、暁光

会のお仕事を手伝われるようになつて、もうどれほどになりますの」

詫 摩 「足かけ九年にもなりますかしら？」

岡 部 「どういうきっかけからお手伝いをなさるようになります――」

詫 摩 「私、世の中で恵ぐまれてない人たちのために、働くということが、昔から好きなものですから……。そ

れで、須磨の教会で、バラード神父さまが、新川のスマム街に飛び込まれてお仕事をなさる――というお話を聞き、直接、神父さまにお会してお手伝いさせて下さいつてお願ひしたんです。そうしましたら、神父さまはニコニコお笑いになりながらへとうてい続かないだろう▽

とお思いになつたのでしきうね、『ともかく、来てごらん』とおっしゃいましてね、葺合区の南本町にあるバラックの一間を借りてらした神父さまのお宅へ伺つたのが最初です』

岡 部 「どういう形で、そのお仕事に協力なさりますの。蟻の町のマリアといわれた北原さんのようなお仕事？」

詫 摩 「始めの頃は、子供たちが悪の道に走らないよう」と、土曜毎に幻灯会を開き、日曜日にはお話を紙芝居として歌いやすいキャンプ・ソングなどを歌つてその子供たちと仲良くなることに努力しました。またその子たちを通して各家庭の中に入つていく――という仕事を手伝つてました。それに私は薬剤士ですから、ちょっとした傷や病気など私たちの手に応える程度のお手伝も出来る限りやらせていただきました」

岡 部 「本山の女子薬科大学を出られたのですね。」

詫 摩 「親和高女から頒采短大、そして薬専です。」

「追われゆく坑夫たち」に感銘！

九州炭坑の人たちにも愛の手を――

岡部 「暁光会のお手伝いの他にも、詫摩さんが中心になられて九州の見捨てられた炭坑の方たちに、支援の物

資とか衣類を届けていられるそうですね。」

詫摩 「二年ほど前に岩波新書で上野英信先生の「追われゆく坑夫たち」（一〇〇円）という本が出ました

が……」

岡部 「ええ、私も読みましたわ。あの本は、いま生きている日本人ならば、同じ時代に同じ日本に、こういうふうにして働いたり、若しんなりしている人がいる——ということを知るためにもせひ読んでほしいと思いましたね。とてもわかりやすい文章だし……。」

私は、あれは昭和の女工哀史という感じがするのですが……。大正年間に出された女工哀史が、今でも多くの人の心を激しくさぶるように、読み始める前の自分と読み終つての自分というものが、ハッキリとものを見る目が違つてきますね。そういう秀れたルポですね」

詫摩

「もちろんお氣の毒な方はどこにでもいらっしゃるのですが……。この九州の人たちの働きたいという希望を持ちながら、そして働いていながら生活していくない——という実情に、これはいったいどういうことなんだろうと、そしてその人たちのためにやはり少しでもお役に立ちたいと思つたのです。

それには何が一番いいのだろう——と、思い切つて上野先生にお手紙でご相談したのがきっかけです」

岡部

「上野先生を訪ねられたのですね」

詫摩 「ええ、一度炭坑の人たちとお目にかかった方がもっと強い結びつきが出来るのではないか——と思い九州へ行く決心をし、上野先生にご案内いただいたわけです。この時、友人や従妹たちが参加し、女ばかり五人のグループで参りましたが、それはともかく人間の住むありますまとは思えないひどい生活でしたわ」

岡部 「土門拳さんの写真集『筑豊の子どもたち』でしたか、見ただけでもこちらは胸寒い光景が多いのに、そうしたことを見た際に見てこられたその思いはまた違うで

しょうね」

詫摩 「ええ、ですから、単なるヒューマニズムとか、安っぽい同情とかいうものでそういうことを始めたのならそこでやめた方がいいと思ったんです。そこで私は、この人たちがともかく私たちと同じ位に、憲法でうつたてあるように人間らしい生活が出来るようになるまでは続けなければいけない——とひそかに決心したのです。そしてまず会社の友人や知人などに『みんなの家庭では不用になつた衣類、そういうものを必要としてられる人たちに差しあげて下さい』と、一、二ヶ月の間は、もう毎日毎日、同じことを話してはお願いしてまわりました。」

岡部 「いま、おっしゃったように不用品ね、よく台風などで災害が起きるとそこへ向けて人が集めますわね、募金にしてもね。けれどもね、災害が起らなくても災害があつた以上に常に常時、災害状態にある人がたくさんいるんだということね。今度の石炭調査団の答申を読んでも、またいへんなことだなと思います。非常の事態が平常の状態になつていてる人たちのためにはね、そういうふうに人間が触はれていくような社会構成を、できるだけなくしていく方向にもつていかなければならぬわねそれと同時に、そうした今、困つてている方たちには何とかしなくてわ。いらぬ衣類などを協力なさりたい方もたくさんいらっしゃると思うんですよ。もし、この対談をお読みになられた方の中で、詫摩さんたちのなさつてることに、参加したいという方がればどうすれば——。貴女にご連絡すればいいのですか。」

詫摩 「暁光会でそうしたものを集めて大きな箱につめ送り出しますから、暁光会の方へ届けて下さつても、送つて下さつてもけつこうです。私たちにとって一番うれしいことは、見も知らない方からのお心のこもった応援をいただくことですわ。」

結婚は神さまの御心におまかせしています

岡部 「詫摩さんは、お色が白くて、お目はパツチリしてらして、いかにもマリアさまみたいな感じなんだけど——ご結婚のことはどのように考えてらっしゃいます？」

詫摩 「うわー！このご質問は悲愴だわ（笑）私、カトリック信者ですから……」

岡部 「神さまとご結婚してらっしゃるわけ？」

詫摩 「簡単にいえばそういうことで……（笑）

岡部 「よき家庭を作つて、よき子孫を作る」ということ。それから将来、独身で修道生活する——というこの二つにわけられますがね。でのこの頃のように社会が複雑になりますと、そのどちらでもなくて、やはり神さまのために働く仕事というものが出て來るので。バラード神父さまもいわれるようになつて、やはり神さまのためには、即ち自分に生きる」ということである——というふうに思つています。家庭にはいると、いろいろなことが中途半端になるんではと思うんです」



写真（左）岡部伊都子さん（右）詫摩良さん

岡部 「でもね、貴女のsuchな熱情をもつて同じようなお仕事なさる方がなきにしもあらずだと思うんですけど？そういう方いらっしゃいますか？」

詫摩 「たとえば、暁光会を手伝つての方でそういう方いらしたけど、神学校にお入りになるなど、各自に神さまが私たちのわからないところでお決めになつてゐる道があると思いますから、それはもうお任せして……」

岡部 「そうですか、しかし、私など、この年になりましてもなかなか悟りきませんわ。ひよっとしたら、誰れかに愛されるんじゃないかしらとか、好きな方にめぐり逢えばその方に気にいられたい——と思いますしね。なんだか詫摩さんのお話聞いてみると、こちらの方が子供みたい（笑）」

詫摩 「いいえ、そんなことは——（笑）やはり、なんといいますか、私は神さまを知つてゐるからでは？」

岡部 「そうね、強い信仰がおありだからね。私はなまなましすぎていけないのかしら（笑）」

詫摩 「それに、私自身、しとやかな奥さまとしてじつと家におさまつていてもありませんでしょ（笑）」

岡部 「だつて、この頃、なにもおさまつてゐるのが奥さんとは限らないでしょ。名前だけ奥にいらっしゃる奥さんでも外で走りまわつてゐる奥さんもたくさんいらっしゃるわ。それこそ、昔の奥さまをイメージにおかれ必要はないと思うわ。」詫摩さんはとても女性的な魅力があふれたお嬢さんなのに、ご結婚をそこまで重い、自由な気持——『結婚するしないも神さまの心がけ』という感じでね、たた一生懸命『現在（いま）に生きてられる』といった感じがするんですけど——。

とにかく、大へん地味なお仕事ですが、がんばつて下さいね」



## 芸術の秋の装い

福 富 芳 美

芸術の秋一例年、十一月は『文化の日』に因んで芸術祭参加と銘うつた数々の催しが、各地でさかんに行なわれています。それだけに観劇に、音楽会に、そして文化祭にと装いも新たに出かける機会が、いつもの月よりも多いことでしょう。今回は、そうした場所へいらっしゃるにふさわしい装いのエチケットといったことを参考までにお話してみましょう。

まず、これはどのような場合にも欠かせない心づかいですが、ご自分のこれからいらっしゃる場所なり、集いの性格（内容）をよく知ることが大切です。それによつて当然、着ていかれる服装が違つてくるというものです。ところで、外国の場合、オペラを観に行くとなれば、『オペラにはどんな服装で行く』といったことがすでに習慣づけられていますが、日本の場合はまだまだそこまでは習慣づけられていません。

例えば、県主催の芸術祭オペラ『蝶々夫人』の観劇などには、厳密には『夜のドレス』でないといけないわけで、それに準じた服装をなさるのが正しいわけです。日本で正装して行く観劇といえば、外国のオペラに匹敵できるものは歌舞伎ということになるでしょう。実際歌舞伎座などにいらっしゃる時は、みなさんきれいな華やかな着物を召される方が多いようです。洋服でいえば

夜だったらカクテル・ドレスを着て行くのが本当でしょ。でもお昼間のそれはいけません。カクテルやイブニング・ドレスは、あちらでは夜のものと決められているものです。つまり昼間は、キラキラ、ピカピカするものや、胸や腕の出すすぎたデザインのものは避けなくてはいけません。日本の場合、和服のエチケットは十分心得てらっしゃっても、こうした洋服の場などのエチケットに関しては未完成のようです。もちろん、そうした正装用の装いで出るというチャンスが少ないから無理もありませんが……。

といつてそんなに難しく考えなくとも、観劇や音楽会などには、スーツ、ツーピース、アンサンブルなどでもいいわけです。ワントースのアフタヌーン形式のものだと、アフタヌーンは夜着てもさしつかえありません。デザインや生地の選び方に神経をお使いになればよく、同じスーツやツーピースでも、やわらかい感じに仕立て、豪華さを出したものとか。スーツなら組合わせるブラウスに工夫するなどデザイン、生地とともに『よそいき的』な雰囲気をもつたものをお召しになれば十分です。また夜の音楽会などにいらっしゃる時は、せめて持ちものだけでも花やかなものにしましよう。例えばハンドバッグ一つをとりあげてみると、なんでも入いるという便利な実用型はさて、布地で出来たややドレッシーな小型に持ち替える——といった心づかい一つで十分なのです。帽子はかぶらなくてもかまいませんが、手袋はお持ちになること。靴をはき替えるのもいいでしょう。そうした持ちものやアクセサリー的なもので雰囲気を出す工夫をなさつてください。

男の方もそうした場には、キッチンとした上下のそろつた服装——黒っぽいものとか、濃いグレーなどに、真っ白なワイシャツとネクタイといった服装でいらしてほしいものです。

(神戸ドレスメーカー女学院長・大丸神戸店顧問デザイナー) ■談

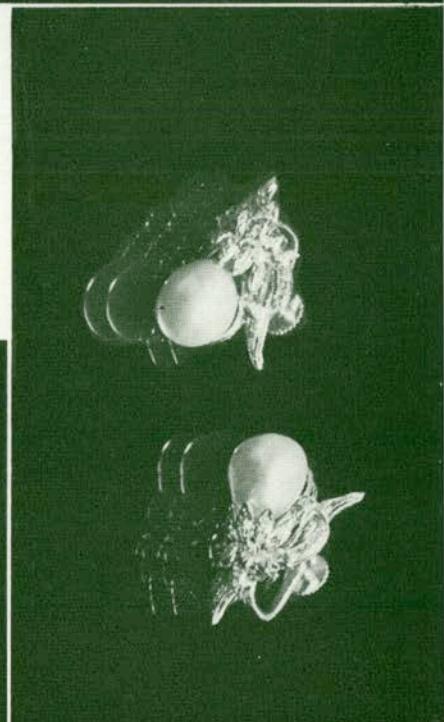


世界の宝石を集め……  
輝やく氣品をおくる  
タジマの宝石

宝石輸入商・宝飾店

**タジマ**

元町2. TEL ③0387・2552





## AUTUMN & WINTER SHOPPING

芸術のアキモとして  
フュを迎えて  
シックなムードと  
楽しさを

おくる店  
装いに

プレゼントに  
ぜひこのお店で  
お選び下さい

左より商品写真説明  
ニットジャンパー(フナキヤ)  
ニットカーデイガン(サカエ)  
冬のオーバー地(トーレイ洋  
装店)バッグと木彫のフォー  
ク(イクシマヤ)舶来チロリ  
アンハットとスカーフ(エス  
ターニュートン)石膏(末積  
製額)





額縁絵画・洋画材料  
室内工芸品

## 末積判太額

三宮大丸北 トアロード  
③一三〇九・六二三四

創作ハンドバッグ

アセサリート工芸品

## イクシマヤ

元町一 (3) 二四一五五六

紳士洋品の店

## サカエ

元町二 (3) 五一一二

秀品店友の会加盟店

豪華に豪華のせて

## トーレイ洋装店

新聞会館1階22一八一八

男子洋品の店

## フナキヤ

元町三 (3) 三六一七

輸入婦人服地雑貨の店

## エスター

ニユートン

トア・ロード (3) 一八一八

良い品を良心的な価格で売る  
タサキパールの直売店が  
銀座に開店しました。  
(銀座西六丁目五並木通り)

# 田崎真珠

(直売店) 神戸・三宮駅前・新聞会館・秀品店  
TEL (22) 5646

(本社) 神戸市葺合区旗塚通り6丁目9 (工場) 神戸市灘区六甲台町24番地